

## 風力発電の導入についての日本鳥学会の基本的な考え方

2023年2月20日  
日本鳥学会会長 綿貫 豊

地球温暖化の一要因である温室効果ガスの削減は、全世界が取り組んでいる課題です。地球温暖化は人間生活に影響するだけでなく、生物多様性喪失の原因の一つでもあります。この問題を解決する方法の一つとして、再生可能エネルギーの利用が有効と考えられています。日本鳥学会も化石燃料の使用量削減を前提とした再生可能エネルギー導入の必要性を認識しています。

再生可能エネルギーを得る方法として、日本では風力発電の導入が進められています。一方、風力発電施設の建設と運用が生態系に様々な負の影響をもたらす懸念もあります。生物多様性保全をはかりつつ温室効果ガス排出削減を達成するためには、生物への影響を少なくするよう風力発電施設の建設場所を選定すること、事前に、長期・広域におよぶ累積的な影響も含めた環境影響評価をおこない、その結果にもとづいて適切な影響回避・軽減策を立ててそれを実行することが重要と考えられます。また、導入後の継続的な影響モニタリングと影響評価の不確実性に対応するための順応的運用や予防原則にもとづいた運用が必要と考えられます。

鳥類はバードストライク、移動の阻害、生息地の喪失等により風力発電施設とその運用の影響を最も強く受ける可能性のある生物です。希少鳥類種の個体数減少は長い時を経て進化した生物種を失うことにつながります。普通種であっても、その個体数の減少や分布の変化はそれぞれが担う生態系機能や生態系サービスの損失につながる可能性があります。日本鳥学会は、風力発電施設の導入には、科学的根拠にもとづき、鳥類への影響を回避し、それができない場合には事業を縮小したり中止したりする必要があると考えています。その実現のために、鳥類の専門家集団として、情報収集、調査、データ解析等の影響評価プロセスにおいて、学会員が有する豊富な知見の活用を目指していきます。また、鳥類への甚大な影響が懸念される個別の風力発電事業計画に対し要望・提言をおこない、さらに地域住民や市民団体とも協力して社会に向けた情報の発信および提言をおこなっていきます。